

史跡賀茂御祖神社境内

2005 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡賀茂御祖神社境内

2005 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび整備事業に伴う史跡賀茂御祖神社境内の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 17 年 3 月

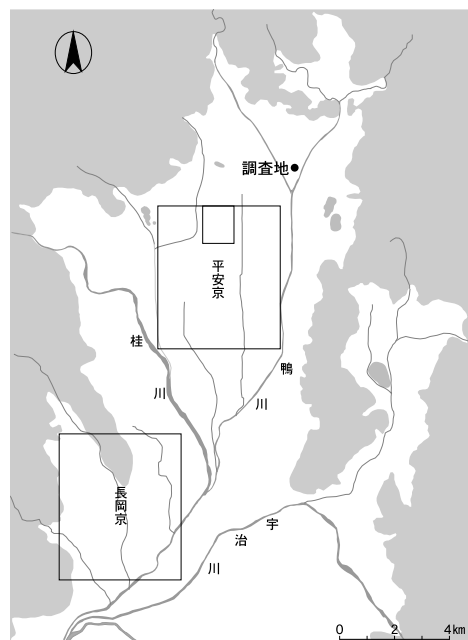
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡賀茂御祖神社境内
- 2 調査所在地 京都市左京区下鴨泉川町 59
- 3 委 託 者 宗教法人 賀茂御祖神社 代表役員 新木直人
- 4 調査期間 2005 年 2 月 14 日～ 2005 年 3 月 31 日
- 5 調査面積 50 m²
- 6 調査担当者 櫻井みどり
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「相国寺」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 遺構種類ごとに通し番号を付した。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 櫻井みどり
- 18 編集・調整 児玉光世
- 19 石敷遺構に使用された川原石については、山城郷土資料館の橋本清一氏よりご教示いただいた。祭祀遺構については、新木宮司よりご教示いただいた。記して謝意を申し上げる。

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	1
(1) 位置と環境	1
(2) 既往の調査	2
3. 遺 構	4
4. 遺 物	10
5. ま と め	11
6. 付章 緊急調査	15

図 版 目 次

図版 1	遺構	1 調査区全景（北から） 2 南拡張区石敷遺構 2（北から）
図版 2	遺構	石敷遺構・祭壇状遺構・祭祀遺構（南東から）
図版 3	遺構	1 西拡張区全景（東から） 2 祭壇状遺構断割り断面（北東から）
図版 4	遺構	祭祀 2～4 検出状況（北から）
図版 5	遺構	1 祭祀 1（北から） 2 祭祀 2（北から） 3 祭祀 3（北東から） 4 祭祀 4（北東から）
図版 6	遺構	1 祭祀 6 遺物出土状況（南から） 2 祭祀 6 遺物取上げ後（南から） 3 祭祀 5（東から） 4 祭祀 7（北東から）
図版 7	遺構	1 平成 13 年度調査（北西から） 2 平成 13 年度調査 石敷遺構（北西から）
図版 8	遺物	出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査前全景	1
図2	調査風景	1
図3	調査位置図（1：50,000）	2
図4	調査区配置図（1：3,000）	3
図5	調査区平面図（1：80）	5
図6	調査区断面図（1：40）	6
図7	祭祀1・2実測図（1：10）	7
図8	祭祀3・4・6実測図（1：10）	8
図9	土器実測図（1：2）	10
図10	祭祀6出土銭貨拓影（1：1）	11
図11	平成12年度調査発見の集石遺構（上段）と御蔭神社の石座（下段）との比較	12
図12	「樹下神事図」酒井抱一	13
図13	調査位置図（1：2,500）	15
図14	遺構実測図（1：20）	16
図15	調査地点配置図（1：200）	16
図16	調査地点全景（東から）	17
図17	柱穴（南西から）	17
図18	「下加茂御本社」『都名所図会』	18

表 目 次

表1	遺構概要表	4
表2	遺物概要表	10

史跡賀茂御祖神社境内

1. 調査経過

今回の調査は、平成3年度に京都府・京都市文化財保護課の指導により実施された試掘調査¹⁾で発見し、平成13年度に(財)京都市埋蔵文化財研究所が再調査した石敷遺構の復元整備事業に伴うものである。そのため今回の調査目的は、石敷遺構の規模や性格を明確にすることであった。

調査は、先述(平成3年度・平成13年度)の調査区の再発掘と遺構の範囲を確定するために新たな調査区を設定し、前回の調査部分から掘り下げを開始した。

その結果、今回新たに設定した調査区の表土直下(黄褐色土層上面)で、祭祀跡と考えられる遺構を確認した。このため石敷遺構まで掘り下げず、黄褐色土層上面での調査を開始した。黄褐色土層の性格を明らかにするために、西側と南側に拡張区を設定し調査を継続した。また、部分的にサブトレンチを設けて黄褐色土層を掘り下げ、石敷遺構との関係や規模を追求した。なお、南拡張区では、別の石敷遺構を確認した。

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

賀茂御祖神社(以下、下鴨神社と表記)が鎮座する糺ノ森は、賀茂川と高野川の合流地点に所在する。周辺には植物園北遺跡や上賀茂遺跡などが存在する。これらの遺跡では、縄文時代の遺構・遺物が確認されている。また、植物園北遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居跡20数棟、古墳時代前期の竪穴住居跡20数棟、上賀茂遺跡では、古墳時代後期の竪穴住居跡数棟も確認されている。これらの集落遺跡は、古代豪族鴨氏との関係が考えられている²⁾。下鴨神社(賀茂御祖神社)の祭神は賀茂建角身命と、その子玉依媛命である。上賀茂神社(賀茂別雷神社)の



図1 調査前全景



図2 調査風景

祭神は、玉依媛命の子賀茂別雷神である。両賀茂社は、平安京遷都後、氏神を祀る神社から、朝廷の祭を行う国家祭祀の神社としてその形態を整えていく。

弘仁元年（810）には、斎王が任命され、下鴨神社境内に斎王御所が造られた。（斎院の制は、その後建暦2年（1212）までの400年間、32代（35人）にわたって続いた。）

葵祭は、元は氏神の祭であったものが、官祭へと変化したものである。

（2）既往の調査

糺ノ森の整備工事に先立ち平成2年度から京都府・京都市の指導で試掘調査が開始され、平成5年度まで5次を数える³⁾。

試掘調査の結果、奈良の小川（1990-1・2、1991-1・2）・瀬見の小川（1990-3・4、1991-3）の旧流路跡や神宮寺跡（1991-7）の痕跡、神宮寺の池から流れ出していた溝（1991-5）、祭祀遺構・集石遺構など（1990-2、1991-2）の所在が明らかとなった。1990-1・1991-1の調査区を設定した船ヶ島では、磨滅していない縄文土器が出土している。（ただし、遺構は確認していない。）また、高杯など祭祀に使用されたと考えられる土器なども出土している。奈良の小川（1991-2）の調査区内からは、江戸時代頃の土壌を検出している。土壌内には、土師器の皿が2枚裏返しに置かれ、その下から刀子が2本出土している。祭祀の痕跡と考えられる⁴⁾。全調査区からの出土遺物は、整理箱で約100箱であった。土師器・瓦がほとんどである。

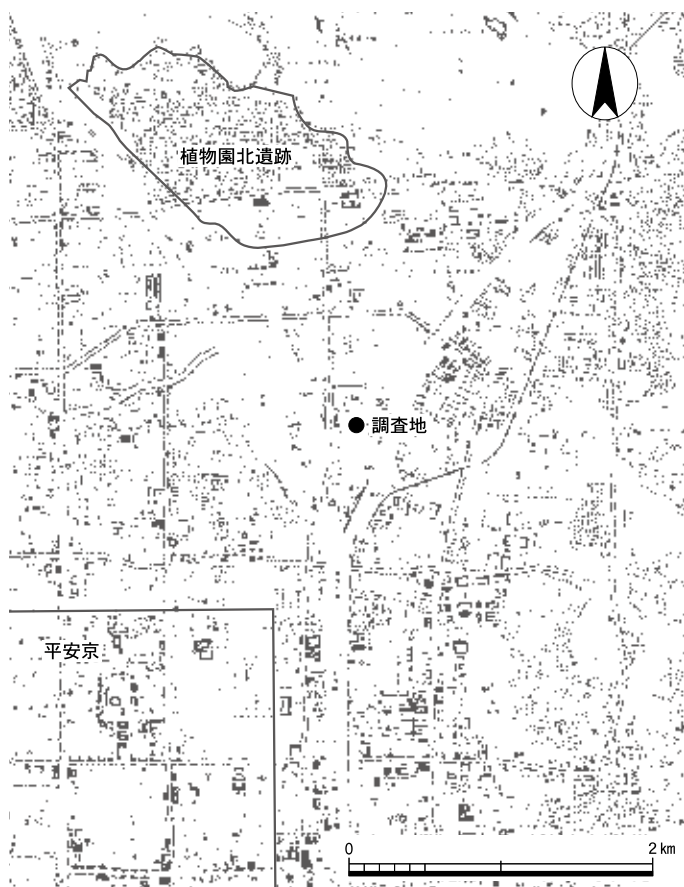


図3 調査位置図（1：50,000）

これらの調査結果を受けて、奈良の小川の復元整備工事が実施されることとなった。工事実施に先立ち、奈良の小川の全容を確認するため、平成12・13年度に（財）京都市埋蔵文化財研究所で発掘調査を実施した⁵⁾。発掘調査の結果、平安時代の流路跡（奈良の小川）を泉川から瀬見の小川の合流地点まで約66mにわたって確認した。小川はほぼ直線の素掘りで、東から西に向かって流れており、底部の勾配がほとんど無いことから、水の流れは緩やかであったと考えられる。小川の岸で、御蔭祭時の幄屋の痕跡と思われる石組み遺構を確認した。また、小川の南岸では、祭祀遺構と考えられる遺構を数ヶ所で確認した。

下鴨神社境内では、他に斎王御所の

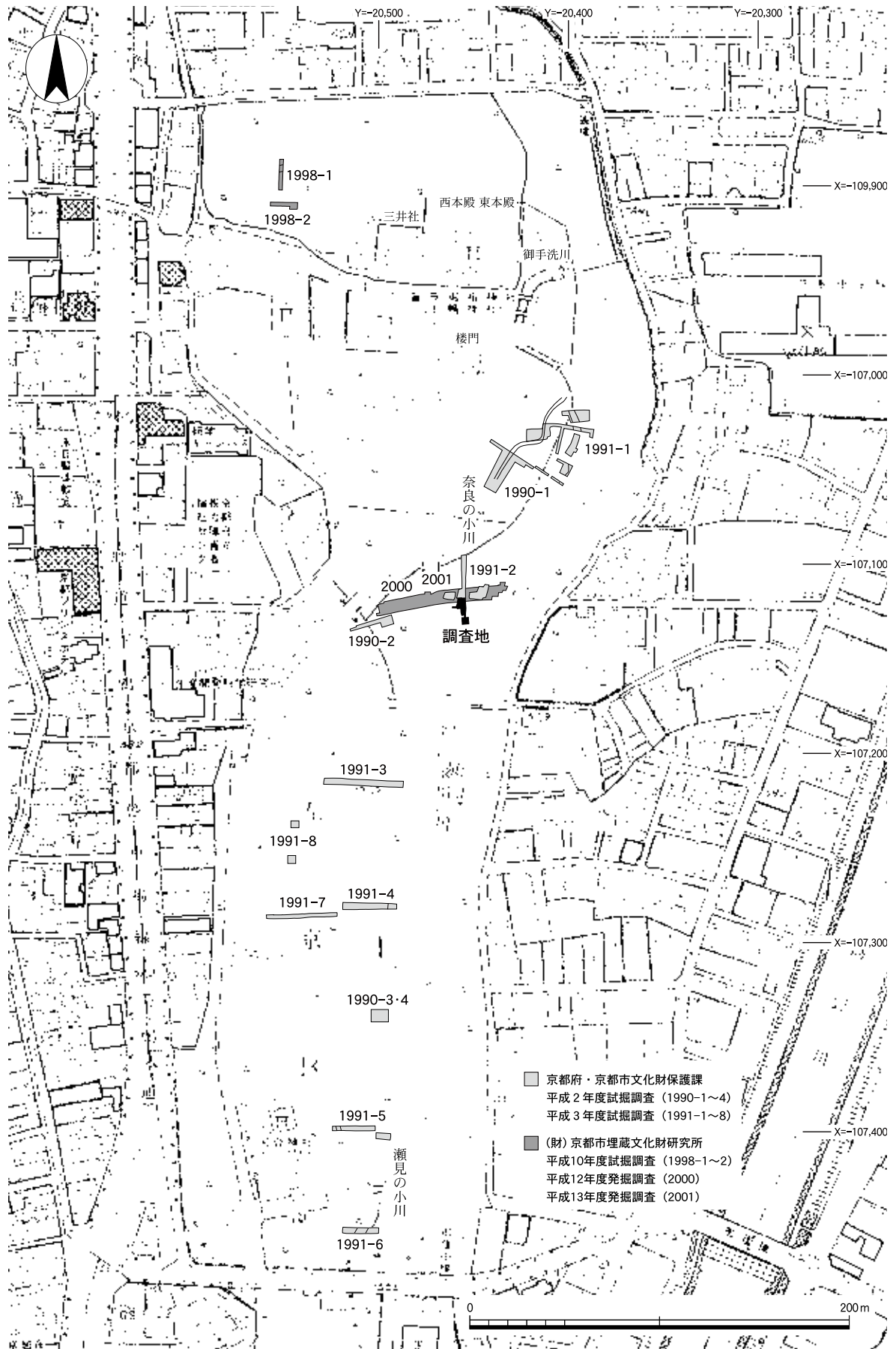


図4 調査区配置図 (1 : 3,000)

再建計画に伴い試掘調査を平成 10 年度に実施した⁶⁾。調査の結果、江戸時代の流路、鎌倉時代の石敷と石列、鎌倉時代以前のものと考えられる土壌を確認した。なお、この土壌は、掘立柱建物の柱穴の可能性も考えられることから、鎌倉時代以前の建物、『鴨社古図』⁷⁾に見える建物の一部とも考えられる。

3. 遺 構

調査区の基本層序は、表土、盛土の下に黄褐色土層、その下に灰色の粘質土で覆われた石敷遺構となる。石敷遺構の下は平安時代後期以前の遺物を含む整地層となる。

石敷遺構 1（図版 2）東西幅は約 6 m である。石敷遺構の西端は、西側の拡張区内で Y=-20,460 ラインあたりで東に下がる箇所を確認したので、これが西端と推定した。東端は、平成 13 年度の調査区南壁断面で確認している。南北幅は、奈良の小川の肩口から集石が一端切れるあたりまで約 7 m と推定した。

この遺構の構築状況は、西拡張区で検出した落ち込みや、調査区東壁断面や石敷遺構の断割り断面などから、浅く掘りくぼめた中に、直径 15 cm から 20 cm 大の川原石を上下に 2・3 段ほど敷き並べていると考えられる。川原石の敷き詰め状況には、部分的に直線状に並べた所が見られるものの、今回の調査区内では、明確なラインや単位は認められなかった。また、各石の上面を平坦にしようとする意識は認められない。石敷面の上部には、灰色の粘質土（約 10 cm）が覆っている。

なお、石敷遺構 1 に使用された川原石は、賀茂川や高野川から運ばれたもので、材質は砂岩・チャートなどであることがわかった⁸⁾。この石敷遺構に伴うと考えられる祭祀 7 は、東西幅のほぼ中央南辺りで検出した。

祭祀 7（図版 6-4）石敷遺構の東西幅のほぼ中央辺り、南北の中央よりやや南側で検出した。赤褐色で埴状の土製品を、上面を平らにして据えている。それを隠すように、川原石を半裁したものを西側に立てて据えている。時期については、石敷遺構 1 に伴う層であることから、平安時代と考えられる。

石敷遺構 2（図版 1-2）石敷遺構 1 の南側に設定した調査区で検出した。遺構の上部にはほとんど堆積土は認められず、最も浅いところでは地表の落ち葉を除去した段階で石敷遺構の上面が現れた。平面形は、全容を明らかにできず不明である。しかし、南西側の石の検出状況から推測すると、楕円形になる可能性が考えられる。石の敷き詰め方は、石敷遺構 1 と異なり、上面を

表 1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	石敷遺構、祭壇状遺構、祭祀遺構(祭祀 1～5・7)	
江戸時代	祭祀遺構(祭祀 6)	

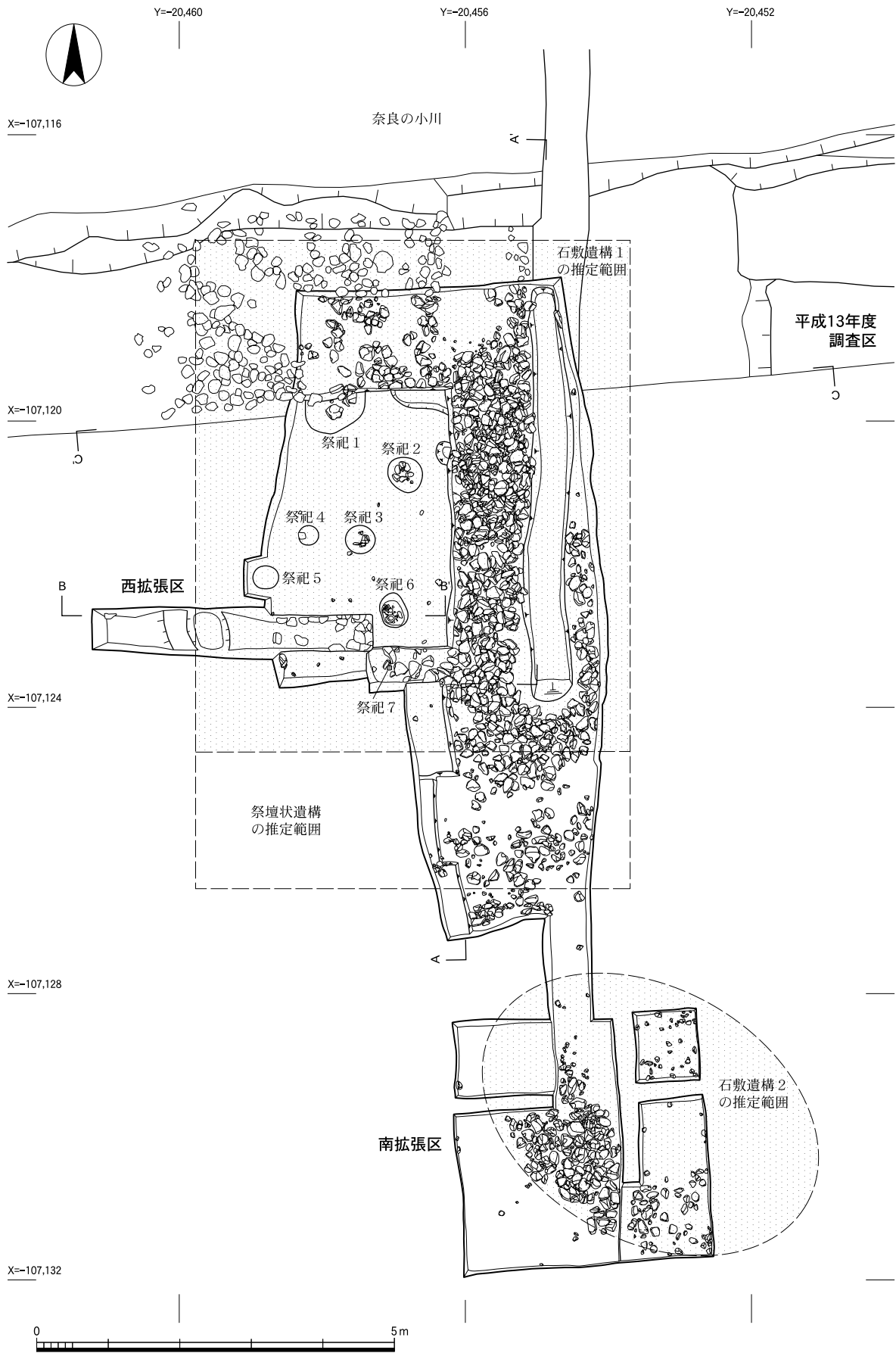


図5 調査区平面図 (1:80)

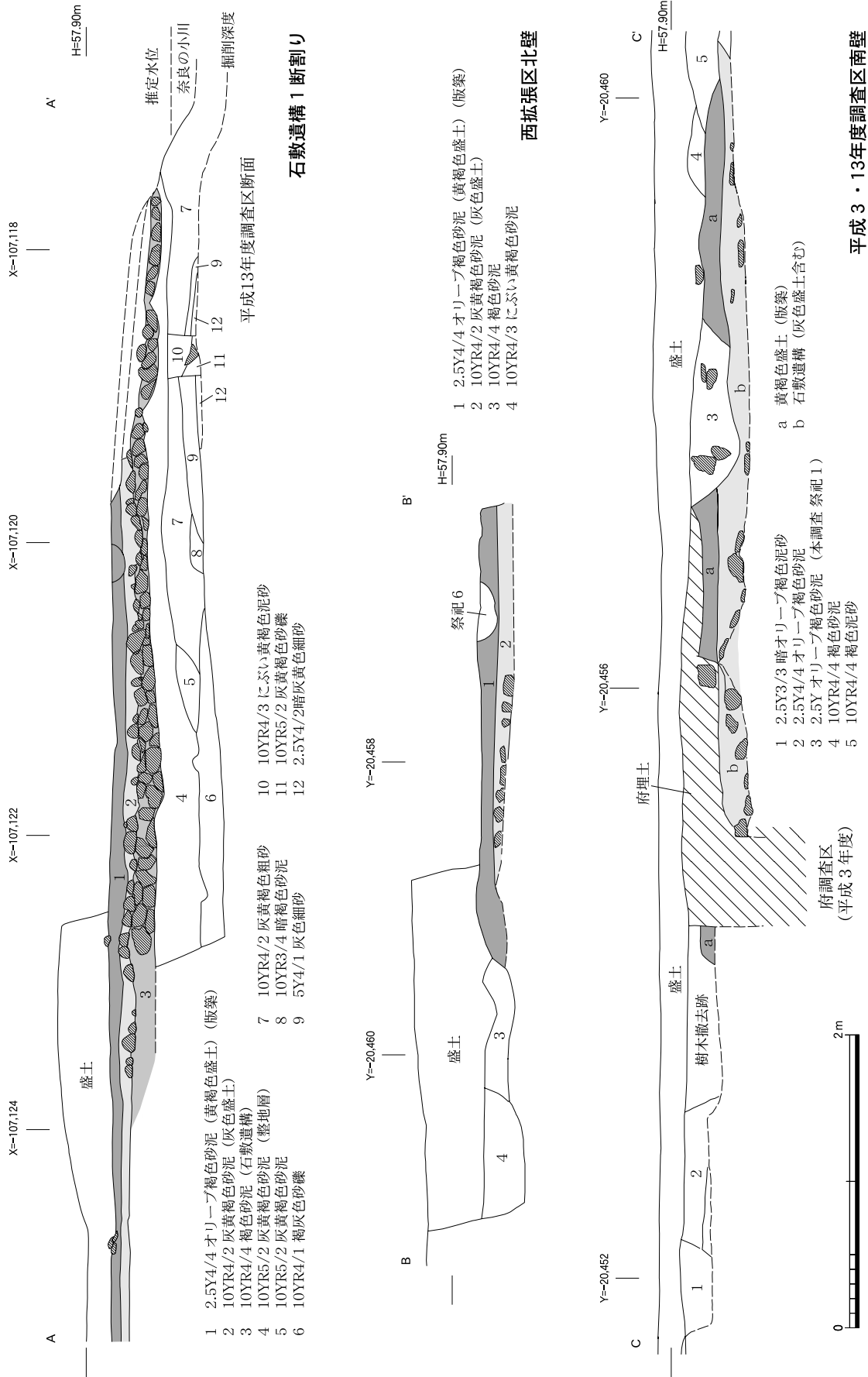


図6 調査区断面図 (1 : 40)

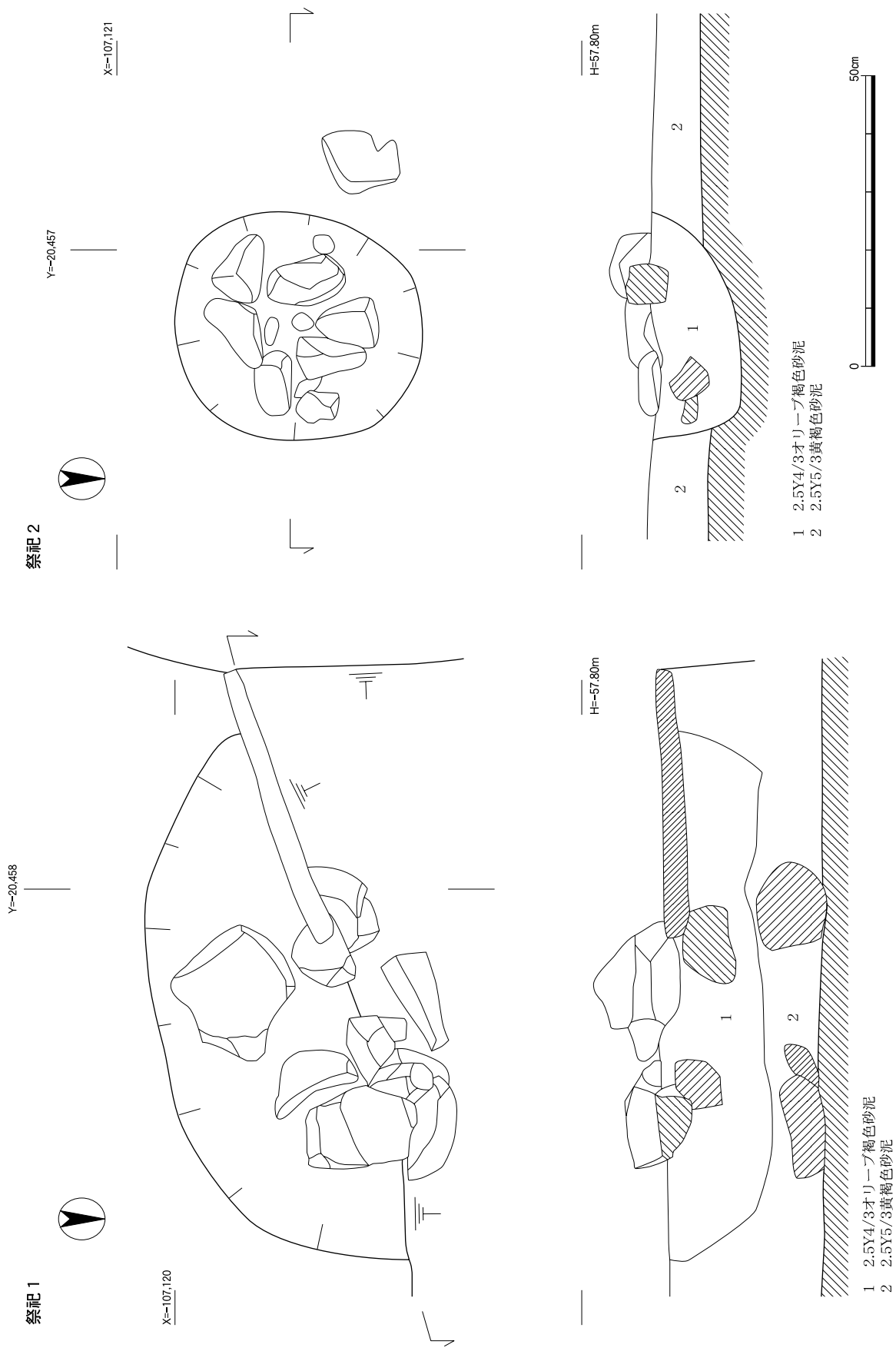
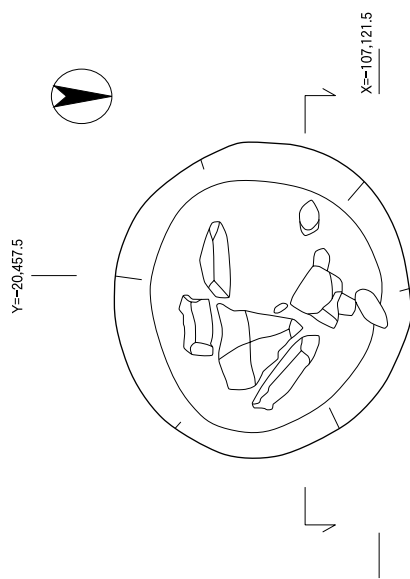


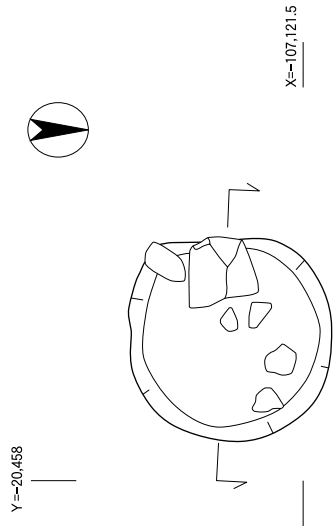
図7 祭記1・2実測図 (1:10)

祭祀3



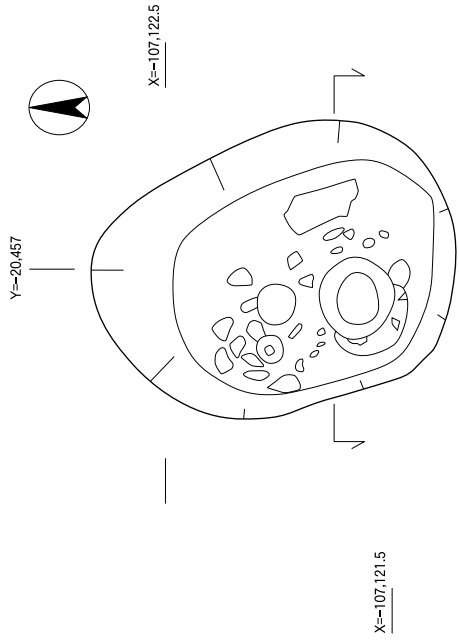
- 1 2.5Y4/4オリーブ褐色砂礫
- 2 2.5Y5/3黄褐色砂泥

祭祀4



- 1 10YR4/4褐色砂泥
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥

祭祀6



- 1 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、炭片多量を含む



図8 祭祀3・4・6実測図(1:10)

なるべく平坦に仕上げようとしていることが観察できる。石の材質は砂岩・チャートなどで、石敷遺構1と同様である。

祭壇状遺構（図版2・3-2）石敷遺構1の上に遺物や石などの混入物を含まない精良な黄褐色土で、版築によって積み上げている（祭壇上にある祭祀遺構を断ち割る際に、土が約2～3cmの厚さで剥離するようにとれたことから版築と判断した）。土壇の規模は、高さ10～20cm、南北は約9mで、東西については約6mとなる。これは、平成13年度調査区の南壁断面で再度検討したところ、幅約6mにわたって黄褐色土層を検出していたことを確認できたことにより、土壇の幅を確定できた。この壇上で祭祀遺構（祭祀1～6）を検出した。

祭壇状遺構を構成している黄褐色土層と、その下の石敷遺構1を覆っている灰色の粘質土層との間に他の堆積が認められない。また、わずかであるが黄褐色土層から平安時代後期の土師器片、石敷遺構1下層の整地層から平安時代後期の白色土器が出土しており、その出土資料から時期差は認められない。このことから、祭壇状遺構は石敷遺構1の成立後、時間をおかずに造られたと推測され、両者には、ほとんど時期差がないと考えられる。

祭祀1（図7、図版5-1）平成13年度の発掘調査の際、トレンチの南壁でその一部を確認した。東西約80cmで、20～30cmの川原石を立てて並べた状態で据え付けている。南北の規模は、残存部分で約50cmである。形状は、円形になると推測される。遺物は出土しなかった。他の祭祀遺構より、やや大振りの川原石を使用している。

祭祀2（図7、図版4・5-2）円形の掘形は、直径約40cmで、10cm前後の川原石を中心に円を描くように据え付けている。出土遺物は、検出できなかった。

祭祀3（図8、図版4・5-3）円形の掘形は、約40cmと推定される。祭祀2と違い、石の配置は円形を示さない。20cm前後の川原石を据えている。周辺に炭の混入が目立つ。

祭祀4（図8、図版4・5-4）円形の掘形は、約30cmと推定される。川原石は1石だけで、約10cmの石が立ててあった。底部に小石が数個埋まっていた。周辺には、炭の混入が見られた。

祭祀5（図版6-3）直径約20cmの円形状に、焼土が残る。

祭祀1～5は、掘形が不明瞭なことや、埋土が祭壇状遺構と同質で混入物が無いことなどから、祭壇状遺構と同時期と考えられる。

祭祀6（図8、図版6-1・2）掘形は長径約47cm、短径約30cmであると推定される。底部に小石を入れて土台とし、土師器皿を平らに据えられるように工夫されている。土師器皿は2枚重なって出土したが、下の皿は少し斜めに据えられている。口縁部分には、煤が付着しており、灯明皿として使用されていたことがわかる。土師器皿の北側で、銭貨（寛永通寶）と底部に穴を穿った土師器小皿を検出した。出土遺物から、江戸時代の地鎮跡⁹⁾と考えられる。

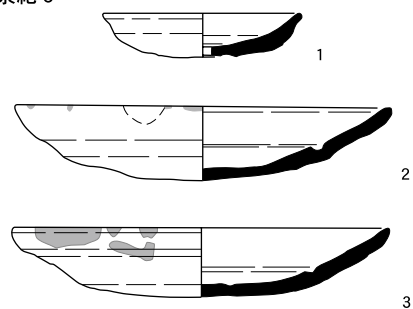
4. 遺物

出土遺物は、平安時代の土器や瓦、江戸時代の土器や銭貨であるが、点数・種類は非常に少ない。平安時代の出土遺物は、石敷遺構下層や石敷遺構を覆う黄褐色土から出土した。江戸時代の遺物は、主に祭壇状遺構の祭祀跡などから出土した。

土師器小皿(図9-1) 口径5.3cm、高さ1.2cmで、底部に直径約4mmの孔を焼成後に開けている。内面は丁寧にナデているが、口縁端部はわずかにナデを施す。外面は丁寧にオサエを施している。穿孔の用途は不明である。¹⁰⁾ 祭祀6から出土した。

土師器皿(図9-2・3) 2は口径10.0cm、高さ2.0cm、3は口径10.0cm、高さ1.9cmである。

祭祀6



整地層

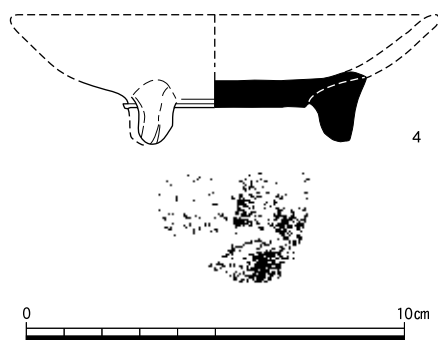


図9 土器実測図(1:2)

口縁端部には点々と煤が付着している。底部から口縁部外面は丁寧にオサエで仕上げる。内面は丁寧にナデを施す。底部から口縁部の屈曲部分に沈線がめぐる。2は、口縁部を人為的に欠いている。2点とも祭祀6からの出土で、灯明皿として使用されたものである。

三足盤(図9-4) 白色土器の三足盤で、底部の外面には糸切りの痕跡を残す。底部の直径は約4.5cm前後で、底部外周に小さな脚部を貼り付ける。脚部は軽くオサエ、面取り風に仕上げる。残存高は2.2cmである。時期は平安時代後期と考えられる。石敷遺構より下層から出土した。

銭貨(図10-5) 直径2.8cm、重さ4.84gを測る寛永通寶である。背面には、波状文がみられる表面の状態は、比較的良好である。祭祀6から出土した。

銭貨(図版8-6) 祭祀6検出面の東側から出土した寛永通寶で、背面は無文である。重さ2.03gを測る。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	白色土器	3箱	白色土器1点	2箱	0箱
江戸時代	土師器、銭貨、鍛造剥片、粒状滓、炭化物		土師器3点、銭貨2点、鍛造剥片一括、粒状滓一括		
近世～近代	瓦、染付、施釉陶器				
時期不明	埴		埴1点		
合計		3箱	9点(1箱)	2箱	0箱

腐食が著しく詳細は不明である。

埴（図版8-7）祭祀7から出土したもので、長さ約11cm、幅約6cm、厚さ約5cmを測る埴状の土製品である。側面は人為的に打ち欠いているため原形を留めていない。表面には、ヘラ状の工具でナデを施している。焼成は良好で、内外面とも赤褐色を呈する。

炭化物 祭祀6周辺部から出土した炭化物である。

樹種分析の結果、松材であることがわかった。松明の一部と思われる。

鉄鍛造片（図版8-8・9）祭祀6とその周辺から検出したもので、鉄の鍛造に伴う鍛造剥片（8）と粒状滓（9）である。

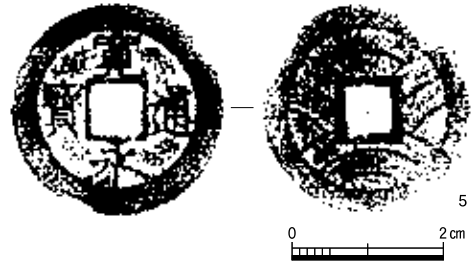


図10 祭祀6出土銭貨拓影（1：1）

5. まとめ

今回の調査の結果、平成3年度に発見された石敷遺構1については、時期や規模を確認し構造を明らかにすることができた。また新たに、この石敷遺構の上面には祭壇状遺構が造られ、祭祀が行われていたこともわかった。

石敷遺構1は、奈良の小川が造られた際の整地層を少し掘りくぼめて川原石を2・3段積み重ねて造られていた。川原石は、上面を平坦にはしていない。川原石は、小川の肩口から置かれ、南へ7mのあたりで一端途切れるので、石敷遺構1の南北の規模を約7mとした。また西端は、掘形の肩部を西拡張区内で確認した。また東端については、平成13年度調査区の断面で確認している。これにより東西は約6mとした。

この6m×7m方形に造られた石敷は、本殿・楼門のほぼ真南に位置しており、これ自体も祭祀の一部であったと考えられる。「古代下鴨神社を祭祀していた鴨氏は石に特別な霊力を感じ、その霊力によってお祓いをしていた。」¹¹⁾という、古代からの信仰に繋がるものと考えることが可能である。

祭祀7は、この石敷内で祭祀が行われた痕跡と考えられる。検出位置は、石敷遺構の東西幅のほぼ中央辺りにあたる。

その後、石敷遺構の上を灰色の粘質土で覆って平らな空間を造りだしている。この上で、祭祀が行われたかどうかは不明である。（祭壇状遺構を残すために、今回新たに調査した部分は掘り下げなかったため、石敷遺構1直上については未調査となった。断面観察からも遺構の確認はできなかった。）

その灰色の粘質土層の上に、黄褐色の土で土壇を造っている。この土壇の規模は、東西約6m、南北約9mと下の石敷遺構より少し大きくなっている。この祭壇状遺構の上では、祭祀が幾度となく行われていた痕跡がある（祭祀1～6）。時代は、平安時代（祭祀1～5）から江戸時代（祭祀6）にわたっている。

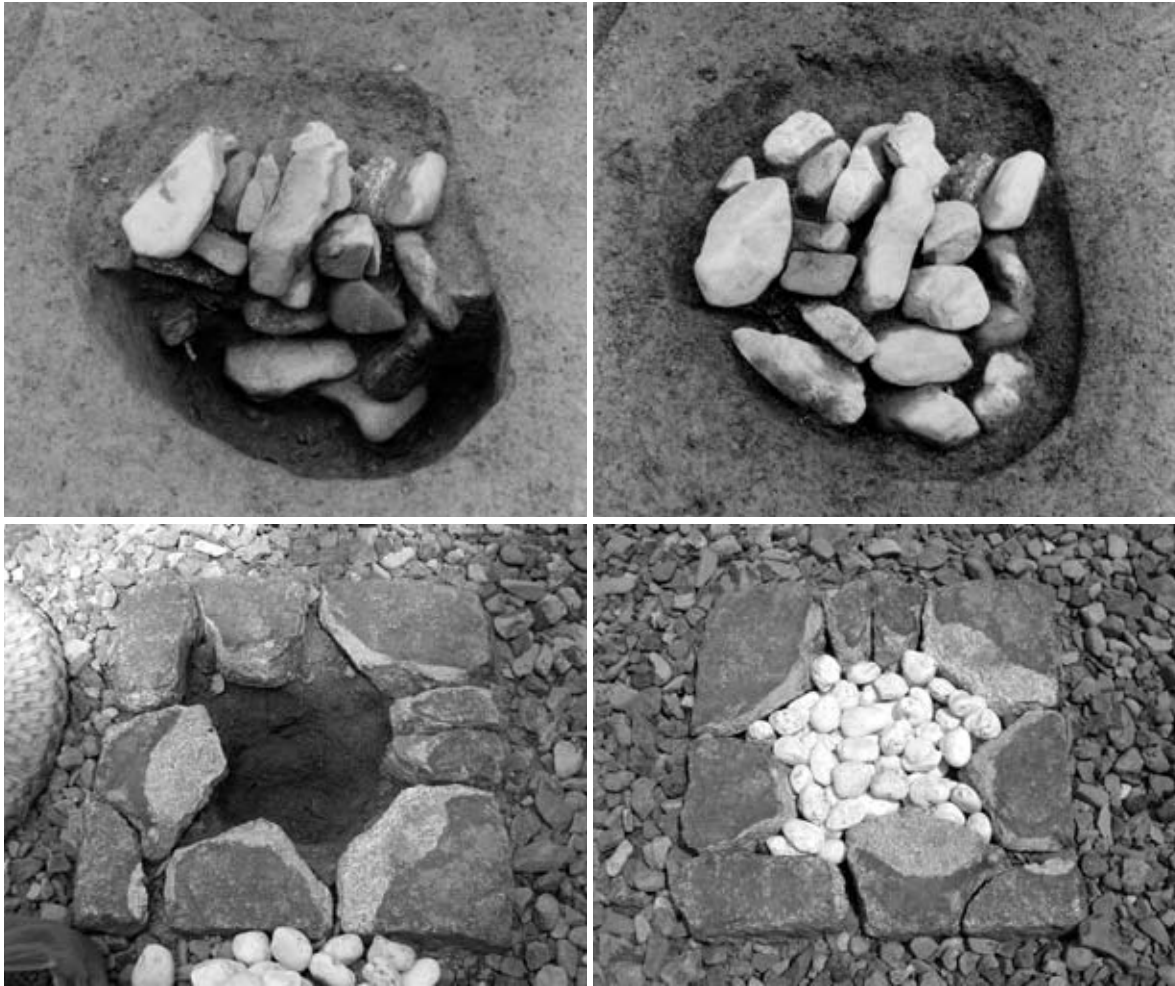


図 11 平成 12 年度調査発見の集石遺構（上段）と御蔭神社の石座（下段）との比較

石敷遺構から祭壇状遺構への移行期間は、非常に短かったと考えられる。遺構の断割り断面（図 6）を観察しても、石敷遺構 1 と祭壇状遺構の間には灰色の粘質土しかなく、この中にも混入物は認められない。このことから、石敷遺構 1 の上で祭祀を行った後、時間をおかずに灰色粘質土で石敷を覆い、平坦地を作り出した。その上に黄褐色土をつき固めて土壇を形成して、新たな祭場としたと考えられる。この祭場では幾度となく祭祀が執り行われ、そのつど埋め戻された。祭祀を行う清浄地としての場所は移動せず、その形態（石敷・土壇）を変えて同じ場所で行われた結果、祭祀遺構が重なっていると考えられる¹²⁾。

下鴨神社では、官祭（朝廷のまつり：祈雨・止雨を目的として行われる臨時奉幣など¹³⁾）と私祭（氏神のまつり）の両方が行われるという特殊な背景を持っている。それに伴い祭祀の行われる頻度は、高かったと考えられる。また、古代より無社殿神と呼ばれる、社殿を持たない自然神をまつる水辺の祭場が、糺ノ森の中に点在している。今日でも、方形の清浄地の四隅に御幣を立てたり、灯明をあげるなどして四隅の神々を祀り、その中央に神降ろしのためのイワクラ（穴を掘り、その中に小石を詰め込む）をつくり、お供えをしてお祀りをしている。現在まで続くこれらの祭祀の様子を今回の遺構のあり方は、よく示していると考えられる。祭祀 6 で出土した土器器皿に煤が付着していたことから、灯明皿として使用されたことがわかった。灯明皿に火を灯し穴の開いた

土師器皿に斎串を挿して真夜中の神事がこ
で行われたことが確認できた。

また、整地層から出土した三足盤、平成
13年度調査で出土している鏡や鈴、平成3
年度の京都府、京都市文化財保護課の指導に
よる試掘調査で出土している刀や土馬といっ
た祭器と考えられる遺物などから、ここでは
私祭である氏神のまつりの他に、屋内で行わ
れる官祭の一部が屋外でも行われていたこと
が明らかとなった。

水際の祭場である奈良の小川の南岸（北に
本殿を望む場所）では官祭と私祭が混然一体
となっている状況であることがわかった。¹⁵⁾

以上、今回の調査の結果を受けて今後の課
題として、平成2年から実施された京都府・
京都市文化財保護課の調査の再検討と、糺ノ
森における再度の分布調査を実施する必要が
ある（糺ノ森では、表土は薄い¹⁵⁾が、比較的遺
構の保存状態は良いと考えられる）。また、検出した遺構の性格を特定するために、文献史料を詳
細に見直す必要があると考えられる。



図12 「樹下神事図」酒井抱一

註

- 1) 『史蹟賀茂御祖神社境内（糺ノ森）発掘調査報告』宗教法人賀茂御祖神社 1992年
- 2) 『史料京都の歴史8 左京区』平凡社 1985年
- 3) 註1と同じ
- 4) 註1と同じ
- 5) 櫻井みどり・津々池惣一『史蹟賀茂御祖神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-12
(財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 6) 註5と同じ
- 7) 『鴨社古図』（賀茂御祖神社蔵）第八回、建仁元年（1201）十二月十日、式年遷宮のため元暦元年（1184）あるいは、建久七年（1196）に描かれたとみられる原図を鎌倉時代に書写したとされている祀官祝鴨脚家旧蔵本（京都国立博物館所蔵）を明治三十八年、賀茂御祖神社絵所預が書写したものである。
- 8) 山城郷土資料館の橋本清一氏のご教示による。
- 9) 新木宮司のご教示による。
- 10) 「個人蔵の絵画（図12）などから、斎串を立てた可能性が考えられる。」と、新木宮司よりご教示を

いただいた。

- 11) 新木直人「下鴨神社と糺ノ森」『下鴨神社 糺ノ森』ナカニシヤ出版 1993年
- 12) 「神社では一度お祭りが行われた場合、同じ場所で繰り返して行うことはなく必ず新しい場所、新しい祭器で行う。同じ場所で行う場合は、前のものを埋めて、新しいものを作って行う。」と、新木宮司よりご教示をいただいた。
- 13) 並木和子「平安時代の祈雨奉幣」『平安時代の神社と祭祀』国書刊行会 1986年
- 14) 御手洗川と奈良の小川が合流する舩ヶ島や、奈良の小川と瀬見の小川が合流する亀島などで確認されている。(平成2年度調査「奈良の小川・瀬見の小川発掘調査の報告会資料」)
- 15) 新木宮司のご教示による。

6. 付章 緊急調査

経過

平成17年3月31日、参集殿北東に位置する鳥居の東側で工事用車両の往来中に参道面が円形に陥没したとの連絡を神社より受けた。急遽現地調査した結果、この穴は柱状の木材の芯が地中で腐植したため空洞化し、地表面が車両の重さに耐えられなくなり、その部分が陥没したことがわかった。

発見した位置・穴の規模などから下鴨神社に関する施設であった可能性が極めて高いため、埋め戻しに先立って平板測量・写真撮影・平面・断面実測などの記録を作成した。

遺構観察

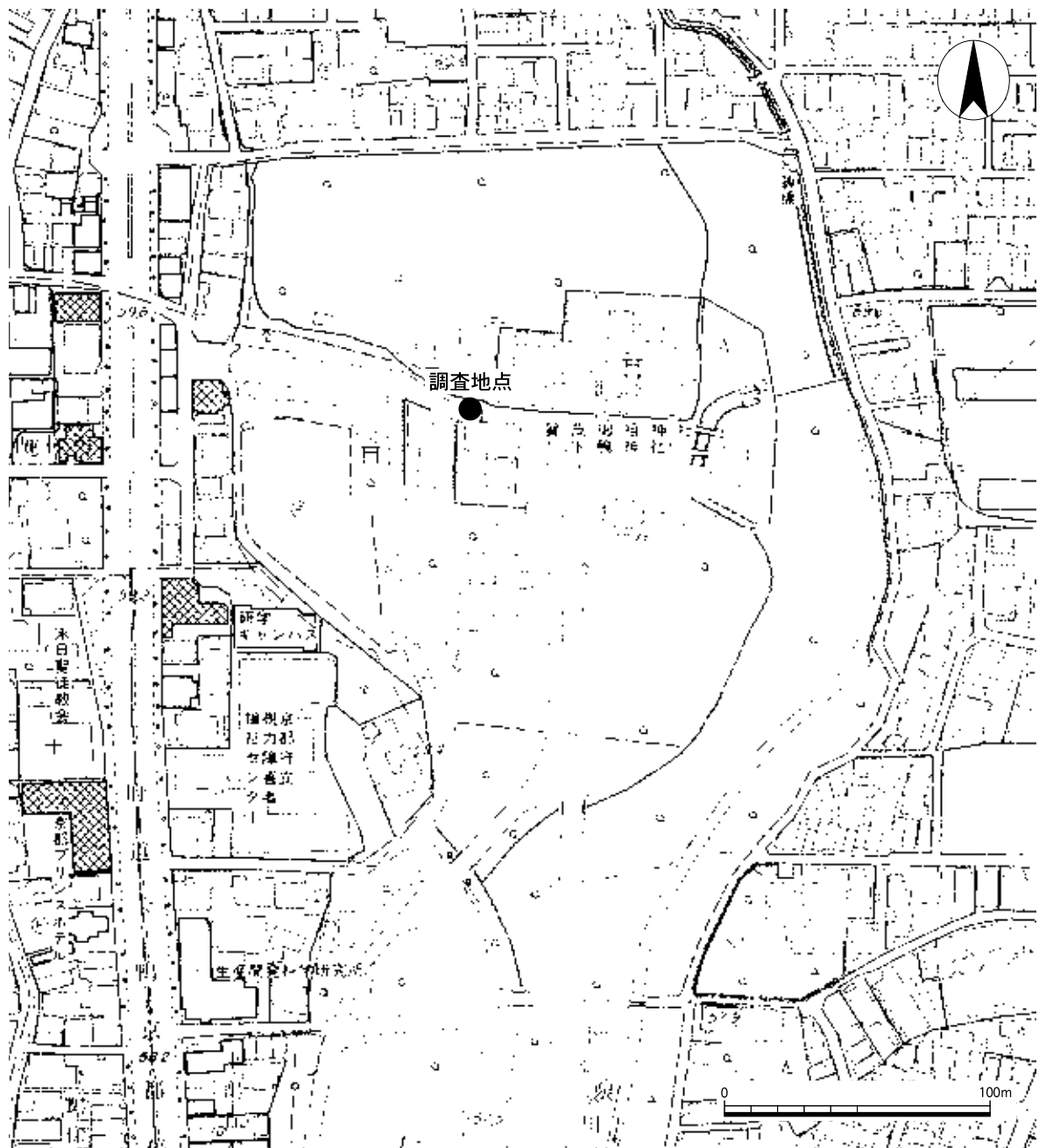


図13 調査位置図 (1 : 2,500)

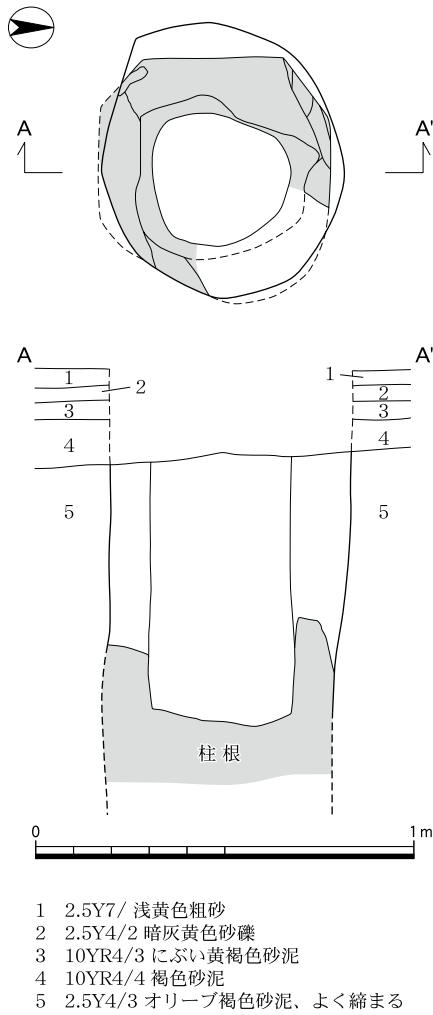


図 14 遺構実測図 (1 : 20)

観察の結果を、以下に箇条書きで示す。

柱穴の上には、参道の整地層 (1 ~ 4 層) が約 30 cm ほど堆積していた。

柱痕の規模は、東西約 75 cm、南北約 65 cm で、深さは地表下約 110 cm を測る。

掘形の規模は、未検出のため不明である。

掘形埋土に八角形に面取りされた柱当りの痕跡を確認した。

柱痕の木質片を分析した結果、檜材であることが判明した。

遺構の時期

柱穴内に崩落した土の中から、江戸時代と思われる瓦片が出土しているが、正確な年代は不明である。

遺構の性格

発見した場所が、境内西側の現在ある鳥居に近接していることや、柱痕が八角形に面取りされていることなどから鳥居の柱である可能性が高いと考えられる。しかし、これ以上の根拠がなく、今後の調査の結果を待ちたい。

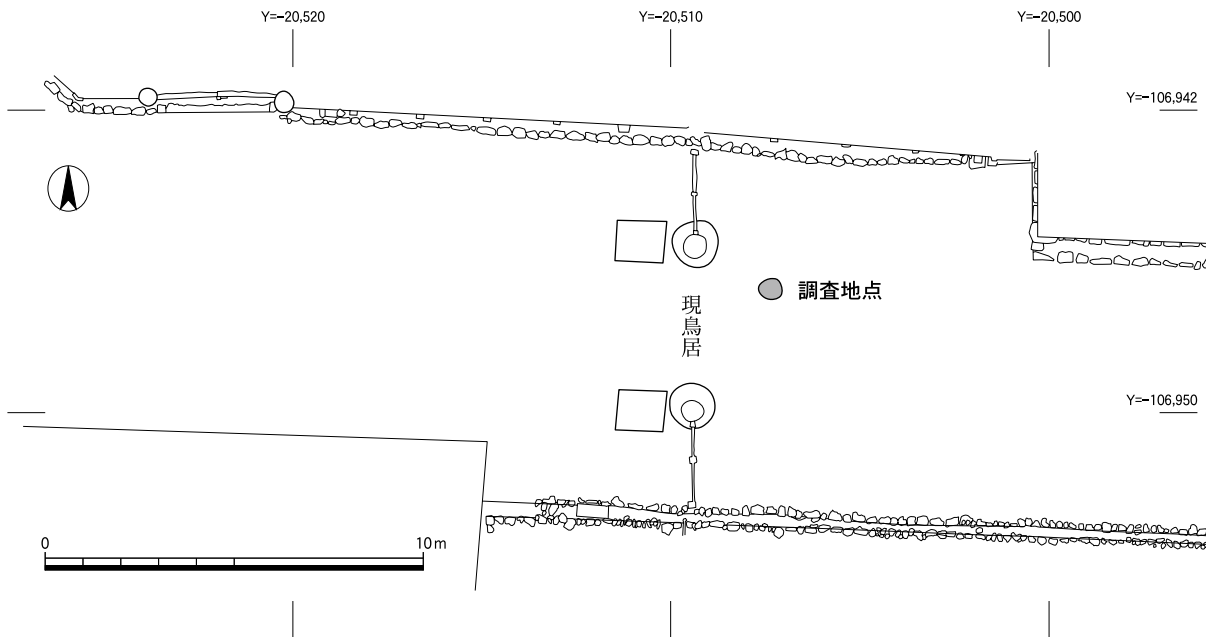


図 15 調査地点配置図 (1 : 200)



図 16 調査地点全景（東から）



図 17 柱穴（南西から）



図 18 「下加茂御本社」『都名所図会』（『新修京都叢書』第 6 卷 臨川書店 1967 年より転載）

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきかもみおやじんじゃけいだい							
書名	史跡賀茂御祖神社境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2004-12							
編著者名	櫻井みどり							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきかもみおや 史跡賀茂御祖 じんじゃけいだい 神社境内	きょうとしききょうく 京都市左京区 しもがもいづみかわちょう 下鴨泉川町59	26100	A309	35度 02分 03秒	135度 46分 33秒	2005年2月 14日～2005 年3月31日	50m ²	整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡賀茂御祖 神社境内	史跡	平安時代	石敷遺構、祭壇状 遺構、祭祀遺構	白色土器				
		江戸時代	祭祀遺構	土師器、銭貨、鍛造剥 片、粒状滓				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-12
史跡賀茂御祖神社境内

発行日 2005年3月31日

編集

発行所 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の1

〒602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒604-0093 TEL 075-256-0961